

ディケンズの復活論

—『二都物語』—

カ 丸 晃

1

To every thing there is a season, and a time to every purpose under the heaven: a time to be born, and a time to die; (中略) a time to kill, and a time to heal; a time to break down, and a time to build up; a time to weep, and a time to laugh; (中略) a time to love, and a time to hate; a time of war, and a time of peace. What profit hath he that worketh in that wherein he laboureth? I have seen travail, which God hath given to the sons of men to be exercised in it. He hath made every thing beautiful in his time: also he hath set the world in their heart, so that no man can find out the work that God maketh from the beginning to the end.¹⁾

『二都物語』の第一段落は上記の聖書の箇所を思い起こさせる。ディケンズがこの物語の冒頭で「時」の重要性に言及したのには個人的な理由があったに違いない。この作品が世に出たのは、それまで10年間続いていた『Household Words』が廃刊し、代わって『All the Year Round』が創刊されたのと機を一にしている。その頃のディケンズは家庭的には大きな転機にさらされていた。すでに前年の5月にはついに妻と別居することになってしまっていた。彼と義妹との関係が夫婦間に摩擦を生じていたからでもあるが、若い女優エレン・ターナン (Ellen Ternan) に彼自身が引き

付けられるようになったためである。²⁾家庭的な破局を迎えていたディケンズは、父親の浪費癖の尻拭いのために経済的問題をも抱えていた。そのような時に公開朗読をすることで起死回生を狙っていたのかもしれない。ディケンズにとって、「時」はまさに最重要課題であったのだ。

It was the best of times, it was the worst of times, it was the age of wisdom, it was the age of foolishness, it was the epoch of belief, it was the epoch of incredulity, it was the season of Light, it was the season of Darkness, it was the spring of hope, it was the winter of despair, we had everything before us, we had nothing before us, we were all going direct to Heaven, we were all going direct to the other way — in short, the period was so far like the present period, that some of its noisiest authorities insisted on its being received, for good or for evil, in the superlative degree of comparison only.³⁾

ディケンズにとって「時」は、彼自身の人間としての雌雄を決するほどの問題であった。「時」は彼の内奥で、己の魂との関わりにとって無視することのできない代物と化していたのだ。ディケンズは人生をやり直したかったのかもしれない。本当の愛への切実な思いが彼をして『二都物語』を書かせたと言うのは、あまりに見当違いであろうか。人生をやり直すには、ディケンズの考えからするならば、「生まれ変わる (rebirth)」しかなかったのではなからうか。それは「^{よみがえ}甦り」の概念と密接に結びつく。その「甦り (resurrection)」こそがディケンズが最も願っていたものである。

果たしてこの地上に生を受けた者が、「甦り」なるものを期待することが出来るのであろうか。生きている者に残されている絶対的なものは「死」のみなのではなからうか。ディケンズはそこにメスを入れるのである。

登場人物を物語に加えていく過程で、ディケンズの心の揺れが暴露されていく。しかし彼は屈しない。ありとあらゆる可能性を探求する。そういう意味では、ディケンズは人生を真摯な態度で探求する求道者であった。

彼の意思によって登場する人物は、彼の人生の課題である「甦り」の実験台である。それは取りも直さず、ディケンズ自身の「甦り」に対する期待の姿なのである。

2

ディケンズが「甦り」を念頭においてこの作品をしたための事は容易に推測できる。歴史小説の形を取ってはいるが、この地上での「甦り」の可能性を検索する作品なのだ。第1巻に「RECALLED TO LIFE」という表題をつけたことは、この作品にかけるディケンズの並々ならない決意を表している。

Dr. Manette は人生の最奥から引き出されるのであるが、それがディケンズが目指す「甦り」であるのかどうかは、ディケンズ自身にも皆目見当がつかないのである。自分が乗った駅馬車を追いかけて来た Jerry から手渡された手紙を見て、Mr. Jarvis Lorry はただ一言 Jerry に彼の返事を託す。それは “my answer was, RECALLED TO LIFE” (p. 9) というごく簡単な一言であった。Jerry にはこの言葉の持つ意味の重さなど分かるはずもない。しかし、この言葉こそディケンズが長い推敲の末にたどり着いた一つの結論であったのだ。その結論の裏づけをするための長い葛藤の始まりを、我々読者に宣言する言葉でもあった。

いとも簡単に結論付けているかに見えるのであるが、それは一つ間違えば底無し沼に陥りかねない危うさを持っていることをディケンズが知らないはずはない。それは Mr. Lorry のロンドンからパリへの旅そのものである。

the hill, and the harness, and the mud, and the mail, were all so heavy, that the horses had three times already come to a stop,

(中略)

they mashed their way through the thick mud, floundering and stumbling between whiles, as if they were falling to pieces at the

larger joints. (p. 4)

駅馬車が丘を登るのを妨げているものは、道そのものである。上り坂でなくても、馬の脚は泥に飲み込まれて、前進を阻まれるのではないかと思えるほどだ。馬も馬車も、そして御者すらも、道路を映し出す鏡であるかのように泥にまみれてしまっている。ここに至って、乗客までもが道路を映し出す鏡と化してしまうのである。しかし、その鏡は霧によって視界を遮られ、本当の道路の姿を見極めることができない。しかも、夜道である。

あげくの果てには、丘を超えるのに乗客自らが馬車から降りて馬車の後押しをしなければならない位なものである。ディケンズの小説に頻繁に現れる「霧(ここでは mist)」に覆われた夜道は、ディケンズの心を決して休ませてはくれない。それどころか不安は増すばかりである。何しろ霧のあまりの深さに前方が闇に覆われているのである。駅馬車の通る道は問題解決に挑むディケンズの進む道を暗示してやまない。

There was a steaming mist in all the hollows, and it had roamed in its forlornness up the hill, like an evil spirit, seeking rest and finding none. A clammy and intensely cold mist, it made its slow way through the air in ripples that visibly followed and overspread one another, as the waves of an unwholesome sea might do. It was dense enough to shut out everything from the light of the coach-lamps but these its own workings, and a few yards of road; and the reek of the labouring horses steamed into it, as if they had made it all. (p. 5)

霧に包まれた夜道では、駅馬車に乗り合わせ、泥にまみれ、力を合わせて馬車の後押しをした乗客同士の間を取り持つきっかけさえ掴むことができない。それどころか、お互いを怪しみつつ己の無事を願うのみで、御者も含めて乗り合わせている全ての者が、それぞれにまるで逃避行をしているかに思えるほどである。

Mr. Manette が10数年間も無実であるにも拘らず幽閉されていた ‘One Hundred and Five, North Tower.’ (p. 44) から無事脱出できたにもかかわらず、正常な生活に戻ることができないわけだ。彼が立ち直るにはあまりにも多くの年月がかかるのである。ディケンズが『二都物語』の冒頭に、聖書の1箇所を意識したときに、この小説が聖書からは決して離れることのできないしがらみが決定的となってしまう。先述の『伝道の書』にある「時」(season, または time) は、明らかに人間の能力の限界を超えたところにあるものだからである。少なくとも、ディケンズの時代はそうであった。とはいえ、彼の時代はある意味では、人間が「時」を操ることができ始めた時代でもあった。一つの仕事を達成するのに、機械の発明等により時間が短縮され始めたからである。

ディケンズが、時代の変化に気づかないはずはない。いやむしろ、気づいていたからこそ、歴史小説の形を取って、心の深奥で密かに培っていた課題に挑戦してみたのだ。それは21世紀を迎えようとしている現代でも超えることのできない、人類最大の課題でもある。それは死と生を分かち「時」の問題なのだ。

‘One Hundred and Five, North Tower’ でこつこつ働いている Dr. Manette の姿は、まさしくこの地上で働く庶民の姿そのものであった。仕事の技術はすばらしく、国宝級のものであったかもしれない。なにしろ、朝から晩まで、晩から朝までただ黙々と働きつづけるのである。人生の快樂は一日中働きつづけた末に確実に訪れるはずの睡眠だ。眠るために働いているのではないかと思わせるほどの、目的のない人生。毎日同じことを繰り返して死んでいく人生。元には戻ることのできない人生。それはディケンズが目を向けていた庶民の人生の集大成であったのだ。

Dr. Manette が牢獄から無事脱出できても、本当の安らぎを経験するのに長い時間がかかるのは無理からぬことであった。「時」の壁を破ることは所詮、神が支配する領域だからである。

Roger Cly に関する話が終盤になって突然降ってわいた時には、読者はやはりそうかと胸のつかえが取れたと言うものだ。Cly という言葉を突きつけられたスパイの Mr. Barsad は、知らぬ存ぜぬを決め付けざるを得ないのであるが、Sydney Carton を初めとして、Cruncher や Mr. Lorry に囲まれて追求されれば、逃げの一手を打つしかなかったのである。

Cly (who I will unreservedly admit, at this distance of time, was a partner of mine) has been dead several years. I attended him in his last illness. He was buried in London, at the church of Saint Pancras-in-the-Fields. His unpopularity with the blackguard multitude at the moment prevented my following his remains, but I helped to lay him in his coffin. (pp. 339-340)

そもそも Roger Cly なる人物の出番は少ない。第1巻に出番がわずかにあったのであるが、いつのまにかその姿を消すのである。しかも彼が姿を消したことを、ディケンズは思いもよらない事から読者に知らせるのだ。そのことが原因で Cly の存在が気になり続けるという魔術に引っかかってしまう。Cly は姿を消してしまったはずなのに、いつかは姿を現すであろうことを読者は無意識のうちに予測しているのである。それでいて、この Cly という名前が再登場する頃には彼の存在などすっかり忘れ去られている。しかし、最後の最後に彼の存在がこの物語のクライマックスを演出するきっかけを作り出していることを見逃すわけにはいかない。

Roger Cly は一度は死んだはずの人物である。誰も死んだところを確認はしていないのであるが、ディケンズが彼の存在に覆いをかけたことは紛れもない事実である。これは「甦り」とは似て非なるものである。

Cly のような方法で人生を変えるなどということは、できない相談と言うわけだ。Roger Cly は自分の偽装の死亡を通して人の命を救おうなどとは芥子粒げしつぶほどにも考えてはいなかった。そのようなことは Cly には似つか

わしくないのである。彼は Barsad の手下であり、彼の心は闇の生活にまみれていたはずだ。空の棺を地中に埋めたからと言って、彼の人生観が変わったのではないことは明々白々である。Cly を手下として操っていた Barsad なる人物にしても Cly と表裏一体である。Barsad が Roger Cly の偽装の葬儀に直接的な関わりを持った時点で、Barsad と Cly は自分で自分の人生をコントロールすることが出来なくなってしまう。人生を偽りで固めた者に与えられる宿命は、その偽りが暴かれることに対する不安と恐怖だ。その偽りが暴露された途端に、一見安定しているかに見える偽りで固めた人生が急速に音を立てて瓦解するのである。

この2人の秘密を暴露するのは、Tellson's Bank の使い走りでもあり、死体発掘者 (Resurrection Man p. 179) でもある Mr. Jerry Cruncher である。彼の人生は、昼と夜の二重生活で成り立っている。彼の人生も偽りで満ちている。昼の顔はある意味では仕事に忠実な下僕のそれであった。しかし、夜にさしかかると彼の顔は一変する。釣りに行くと称して、彼の出向く場所は人気のない墓地である。家族に対しては、自分は正直な商人 (honest tradesman) として働いているのだとそぶく。だからとやかく言うんじゃない、と心配する妻に対して強くのたまう。その実、彼の「商売」が何であるかはすっかり見破られているのである。息子の Jerry Cruncher Jr. にまで見破られては開き直るしかないのだ。

The bank closed, the ancient clerks came out, the usual watch was set, and Mr. Cruncher and his son went home to tea.

'Now, I tell you where it is!' said Mr. Cruncher to his wife, on entering. 'If, as a honest tradesman, my wenturs goes wrong to-night, I shall make sure that you've been praying again me, and I shall work you for it just the same as if I seen you do it.'

(中略)

'Well, then; don't meditate nothing. You might as well flop as meditate. You may as well go again me one way as another. Drop

it altogether.' (pp. 173-174)

Mr. Cruncher が「釣り」に出向いて、その成果が得られなかった時のそのショックは計り知れない。その日の昼間に埋められたばかりの棺を掘り出して蓋を開けた時の Jerry のうろたえぶりを、現場で見たいほどである。ディケンズは読者のそんな気持ちを重々承知していた。我々読者に成り代わって息子の Jerry をその現場を確認するための使者として派遣するほどの念の入れようである。おかげで、Roger Cly なる者の葬儀が偽装であることを誰一人として確信して疑う者はいない。

当然のことながら、Mr. Cruncher は不愉快千万である。出かける前に祈るのだけはやめてくれ、とあれほど言い渡しておいたのにと思うと心が取まらない。息子が、「僕も将来はお父さんのように Resurrection Man になるよ。(‘Oh, father, I should so like to be a Resurrection-Man when I’m quite grown up!’ p. 180)」と言うのを聞いて、ようやく溜飲を下げるのだ。それは、この息子が自分に代わって将来きっと妻に対して仕返しをしてくれるに違いない、と独言ちていることで分かる。

Mr. Cruncher と Mrs. Cruncher の関係は実に奇妙だ。現代風で見れば、夫による妻への虐待の典型的な例だ。Mr. Cruncher は息子の Jerry 共々寄ってたかって妻をバリバリ噛み砕く (to crunch) のだ。気に食わないのは、いくらたしなめても妻が密かに神に祈るのをやめようとしなからだ。妻である Mrs. Cruncher を繋ぎ止めているのは神に対する信頼感だけであるとも言える。ディケンズの神への信頼を垣間見ることのできる部分でもある。ディケンズは藁にもすがりつく思いで、Cruncher 一家を通して神への祈りの力を凝視していたのである。それはディケンズが課題としている「甦り」と決して無関係なことではないからだ。

Mr. Barsad による Roger Cly の偽装葬儀が暴露された時に、もう一つの秘密が暴露されることになる。その秘密の持ち主は、Mr. Barsad の秘密を見事に暴いたその当の本人である。Mr. Cruncher は名探偵よろしく Mr. Lorry と Mr. Carton の前で Mr. Barsad に問いただすのだ。長い間しら

ばくれていたさしもの Mr. Barsad も白旗を掲げて Roger Cly の偽装葬儀のからくりを認めざるを得ないほどの活躍である。その大活躍のにわか探偵も、その後を訪れることになる自分の秘密が暴露されることになるとは考え付かないのである。しかも詰問者が自分の上司とも言える Mr. Lorry ともなれば諦めるしか手はない。あっさり白旗を掲げるふりをしながら Tellson's Bank の主とも言える Mr. Lorry に自分を首にしないでください、と懇願する有様だ。しかもこの Mr. Cruncher という男は、厚かましくも自分の退職後には自分の息子を Tellson's Bank に縁故就職させてくれるように嘆願までしてしまう。息子が銀行での仕事の後継ぎとして受け入れられれば自分は墓掘りを正業にすると行って憚らないのであるが、今度は死人を埋めるだけにして掘り起こすなんて事はしないと約束するのである。Mr. Cruncher としては最低限の譲歩ではあるが、違法な行為をしていたことから考えるならば、少なくとも法に則った職業につくと言うのであるから、Mr. Lorry としても受け入れざるを得ないというわけだ。

Mr. Cruncher は彼なりに「甦り」に1歩近づいたかにみえる。Mrs. Cruncher が、夫が真っ当な仕事をするようにと、這いつくばるようにして密かに捧げた神への祈りの回答が、この大作の終局の場面で花開くのかと見まがうほどだ。確かに、夫は依然として悪態をついてはいるが、不法から順法への変身である。ディケンズはそれでも満足することはない。何故ならばこの変身には闇雲に受け入れ難い部分が隠されているからである。たまたまフランス革命の渦中であって、毎日のように埋葬しなければならぬ死体が町中に転がっていたからである。掘るよりも埋めるほうが金になると Mr. Cruncher が考えたとしても不思議ではない。そのことを計算に入れても Mrs. Cruncher の這いつくばるようにして続けられた祈りは神に聞かれたのである。

しかし、この Mr. Cruncher の心の「甦り」は実に心もとない。何が原因でまた元の木阿弥になるかもしれない不安定さがあるのだ。この不安定さはどこからくるかと言うと、Mr. Cruncher のこの時点での「甦り」とおぼしきものには肝心の「死」の体験が伴っていないことにある。ところがディ

ケンズはこの Jerry Cruncher に対しても大きな期待を持つほど、神の力、祈りの力への信頼を持つ。何しろ、Resurrection Man という夜の顔を持つあの Jerry がいつのまにか Mrs. Cruncher の祈りと同化を始めているのである。それと同時に、彼は自分の命を一人の人物を救出することに捧げる覚悟が出来上がっているのである。これこそが、ディケンズが求める「甦り」の条件なのだ。Jerry Cruncher は Miss Pross に自分の誓約を公言して憚らない。彼は2つの事を誓うのである。「もし Charles Darnay 様が監獄から無事助け出された時には、もうあんな仕事は金輪際やらねえ。妻の祈りを邪魔するなんてこともやらねえ。それに今こそあいつに、しこたま這いつくばって欲しいってえ場面だ。」

‘Would you do me the favour, miss, to take notice o’ two promises and wows wot it is my wished fur to record in this here crisis?’

(中略)

‘First,’ (中略) ‘them poor things well out o’ this, never no more will I do it, never no more!’

(中略)

‘Second: them poor things well out o’ this, and never no more will I interfere with Mrs. Cruncher’s flopping, never no more!’

(中略)

‘and let my words be took down and took to Mrs. Cruncher through yourself—that wot my opinions respectin’ flopping has undergone a change, and that wot I only hope with all my heart as Mrs. Cruncher may be a flopping at the present time.’ (p. 409)

4

Dr. Manette の人生は『二都物語』の時代の歴史そのものである。先述したように、バステューユ監獄での彼の幽閉の10数年間は、フランス革命以前の民衆の姿そのものであった。獄中での彼の所作は、小説の中では直

接的には見るができない。しかし、Mr. Defargeにかくまわれていた時の姿は、彼の幽閉時代の姿の生き写しである。明かりをすみ嫌う彼の態度からは、未来が見えてこない。未来に目を据えるよりも、今の時に全神経を集中させるのである。そうするよりほかに術がない人生を背負わされた人物の代表が、Dr. Manette その人であった。明かりを求めるよりも、目の前にある仕事に精を出すほうが安心できるのである。いや、精を出すと言うよりは、人生に絶望した人間の忌まわしい姿を彼は映し出していたのである。

彼の絶望感は、止まる所を知らない。絶望的な人生からの救いである幽閉からの解放をもってしても、彼は明かりから目を背けるのである。革命的な脱出は彼に本当の安心感を与えない。いや、むしろ靴修理工としての仕事に熱中できた時よりも、絶えがたいほどの不安を抱えることになったのだ。彼が10数年間願って止まなかった「解放」を手に入れても、彼の心の「解放」を手に入れるまでにはなっていなかったのである。だから彼の口を突いて出てくる言葉は、相変わらず「One Hundred and Five, North Tower」と言う大文字で始まる固有名詞と化してしまった自分の囚人番号なのだ。

Dr. Manette は革命という Resurrection Man によって、無実の幽閉状態から解放されたのであるが、その「甦り」は必ずしも 100%のものではなかった。それどころか、暗い獄屋で営々と築いてきた苦しいけれども安定した生活の中では感じたこともなかった不安と悩みに直面しなければならなかったのである。娘の Lucie との生活は獄中にある時には夢想だにできなかったものである。叶えられるはずのない夢の実現は、Dr. Manette に夢の訪れを約束してくれたのであるが、それはまた彼に信じがたい苦悩をも約束していたのだ。

Dr. Manette は現実からの逃避に身を投じようとする自分を押さえるのに躍起となる。そんな父親に垂れ込めている暗い影を払拭する力を持ち合わせているのは (Only his daughter had the power of charming this black brooding from his mind. She was the golden thread that united him to

a Past beyond his misery, and to a Present beyond his misery: p. 85), “golden hair”をした娘の Lucie だ。その娘ですら彼の心の幽閉状態からの解放には力不足を感じざるを得ないほどだ。むしろ彼女の存在こそが、父親の心が幽閉状態から解き放たれるのを妨げていることに娘は気が付かない。それは娘の結婚という父親として最も喜ばしい場面で顕著に現れる。

‘My father,’ exclaimed Lucie, ‘you are ill!’

(中略)

‘No, my dear, not ill. There are large drops of rain falling, and they made me start. We had better go in.’ (p. 109)

この雨は Dr. Manette に降りかかるはずの苦悩の始まりである。彼自身そのことを敏感に感じ取っているのである。Mr. Carton, Dr. Manette, Mr. Darnay, そして Lucie とがいっせいに切実な問題であることを予感する。その予感は会話が進むにつれて疑う余地のないものとして確認されていく。

‘The rain-drops are still falling, large, heavy, and few,’ said doctor Manette. ‘It comes slowly.’

‘It comes surely,’ said Carton. (p. 110)

そして足音だ。にわかには降り出した雨から逃れようとする人々の足音は、Dr. Manette 家での静かな会話にさざ波を立て、やがてのっぴきならないものに変えていく。それは Lucie が抱いている不安と密接に結びつくのに十分な迫力を持つ。Dr. Manette がまるで獄中にいた時にしたのと同じように、夜中にふと目を覚まして、自室をコツコツを歩き回る足音 (he gets up in the dead of the night, and will be heard, (中略) walking up and down, walking up and down, in his room. Ladybird has learnt to know then that his mind is walking up and down, walking up and down, in his

old prison. p. 105) と重なり合って、不気味なまでに不安を駆り立てていく。一度死んだはずの Dr. Manette に与えられた「甦り」の姿はそういうあやう危い側面を持ち合わせているのだ。

'I have sometimes sat alone here of an evening, listening, until I have made the echoes out to be the echoes of all the footsteps that are coming by-and-by into our lives.'

(中略)

The footsteps were incessant, and the hurry of them became more and more rapid. The corner echoed and re-echoed with the tread of feet; some, as it seemed, under the windows; some, as it seemed, in the room; some coming, some going, some breaking off, some stopping altogether; all in the distant streets, and not one within sight. (p. 111)

Lucie と Charles Evrémone, called Darnay との結婚は、Charles Darnay の父と叔父が犯した罪のために Dr. Manette を不幸のどん底へと落とし込む。(ディケンズは創世記のアダムとエバの神への背きを扱った原罪の問題に言及したかったのである。) この不幸がディケンズが探求する「甦り」への足がかりを与えるものに発展するのである。この事件は Dr. Manette にとっては二重の責め苦だ。自分を無実の罪で投獄した復讐の対象人物が事もあろうに最愛の娘と結婚し、しかも己の身を投げ打って彼の救出に全力を傾注しなければならないのだ。一度甦ったはずの Dr. Manette は「甦り」(RECALLED TO LIFE) 以前の生活に逆戻りをすることになる。つまり One Hundred and Five, North Tower での目的のない生活に戻ろうと言うのだ。そこにディケンズの苦悩がある。この地球上には本当の救いはない、との思いがディケンズを苦しめる。だからこそ、「甦り」を実現させる試みに邁進せざるを得ないのである。

5

ディケンズの悩みは、自分を Darnay に置き換えるべきか、Carton に置き換えるべきかと言う部分に凝縮される。彼の迷いは Carton という人物を創造した時にすでに始まっていたのである。その迷いは、ディケンズが Carton の名前を当初 Dick Carton にしようとしたことに現れる。それは自分のイニシャルが念頭にあったことは容易に推察できる。⁴⁾酒浸りの奢り高ぶった生活をしていたこの有能な弁護士は、『二都物語』を書いていた当時のディケンズ自身の心の状態と瓜二つであったのだ。家庭的に恵まれていたとは言えないディケンズにとって、救いはない。自分が犯していた(と自覚していた)不倫によって家庭を崩壊させた罪からの脱却は「甦り」にしか見出されなかったのだ。だからと言って、必ずしも彼自身は世に言う悪人でもなかったのだ。むしろ善人と言われてもよい存在ではあった。その意味ではディケンズが自分を Darnay に置き換えたくなくなったとしても不思議ではない。ディケンズは多くの善人の一人に過ぎないとの思いがあったのであろう。だからこそ Darnay のフランス名を Evrémonde (= Everyman)⁵⁾としたのだ。

Darnay はスパイの嫌疑で裁判を受ける被告として登場する。彼の父親と叔父がこの世の悪の代表者であろうとなかろうと、Charles Darnay は善意の人物である。彼は貴族としてのあらゆる特権を放棄し、善良な市民としてその生活を自分の努力によって成り立たせていたという点においては、模範的な人物であった。ディケンズにとっては、Charles Darnay のその善良さが問題でもあったのである。善良であれば「甦り」の体験は必要ないのであろうか。ディケンズの立場からすれば「否」である。一度死ななければ、「甦り」はない。死ぬにはそれなりの理由がなければならない。Mr. Cruncher は彼なりの死を体験することによって、Mrs. Cruncher の這いつくばるような祈りを必要とするようになった。

Charles Darnay の場合の死の理由は何であったのか。それは紛れもなく「原罪」である。彼の場合はアダムとエバに遡るまでもなく直接の先祖である父親にその「原罪」の由来がある。いくら身を隠しても、いくら善良な

市民生活を送っていたとしても、その「原罪」から逃れることはできはしない。だからこそ、Monsieur Gabelle からの救済の嘆願書が自分宛に届いた時に、Charles Darnay は逃げることができない。彼は密かにイギリスを脱出してフランスに赴く。

The House approached Mr. Lorry, and laying a soiled and unopened letter before him, asked if he had yet discovered any traces of the person to whom it was addressed? The House laid the letter down so close to Darnay that he saw the direction—the more quickly because it was his own right name. (p. 265)

イギリスは Darnay にとっては「原罪」を忘れて生活することのできる場であった。ディケンズはそんな Darnay の立場を、Marquis St. Evrémonde 宛の手紙の行方で表そうとしているのだ。フランスの貴族が続々とロンドンの Tellson's Bank に逃げ込んでいたわけであるから、銀行の頭取がその宛名を知らないはずはない。にも拘らず彼はその届け先が分からないと言うのだ。Charles Darnay の結婚の仲人とも思えるほどに Darnay と親しい関係にあった Mr. Lorry ですら、Dr. Manette の娘婿のフランスでの素性を知らなかったのである。知っていたのは Dr. Manette だけである。我々読者ですら、この秘密を上記の直後に知らされることになるのである。それほどまでにうまく身を隠していた Charles Darnay が革命の嵐が吹きすさぶ真っ只中に進もうとしているのである。

ディケンズはあえて「原罪」と対決する決心なのだ。奇しくも Mr. Defarge の酒屋の前で荷車から落ちてサン・アントワーヌの通りに撒き散らされた血の色をしたワインが、こんな所で効力を発揮するのだ。Charles Darnay のフランス行きは、彼に群がる血に飢えた民衆の恐ろしさを予感させる。

It had stained many hands, too, and many faces, and many naked

feet, and many wooden shoes. (p. 30)

they are headlong, mad, and dangerous; and in the years long after the breaking of the cask at Defarge's wine-shop door, they *are not easily purified when once stained red*. (p. 245)⁶⁾

Darnay はようやくたどり着いたパリで投獄されることになる。これは彼が「甦る」ための前段である。彼は獄中であって愛する妻を思い、愛しい娘 Lucie を思い、いたたまれない気持ちにさいなまれる。そんな苦悩の真っ只中にある Charles Evrémonde, called Darnay を獄屋から開放したのは、他ならぬ Darnay の父、叔父によって投獄されて、今は妻の父親でもある Dr. Manette である。Dr. Manette はこの時は既に One Hundred and Five, North Tower に於ける「死」の亡霊から解放されている。でなければ、自分の敵であった人物の息子を助け出すなどと言うことは出来なかったのである。もはや、彼の夜中の足音も聞かれなくなっている。そこにあるのは、「許し」であった。娘である Lucie との結婚を打ち明けられ、娘夫婦の新婚旅行中に、Dr. Manette は「憎しみ」からも解放されたのである。「死」なくして「甦り」がないのと同様に、「許し」なくしては「甦り」はないのである。

Mr. Cruncher が経験したのもまさにそれであった。Mrs. Cruncher に「祈ってくれ」と頼んだことによく表れている。一方、Dr. Manette と同じ人物に敵意を感じている Madame Defarge には「許し」の感情がない。彼女は自分が強く抱きつけた「憎しみ」を思い返すことを日課としていたのだ。ディケンズはそれを編物という形で具現化させる。

Then, she glanced in a casual manner round the wine-shop, took up her knitting with great apparent calmness and repose of spirit, and became absorbed in it. (p. 36)

'You knit with great skill, madame.'

'I am accustomed to it.'

'A pretty pattern too!'

'You think so?' said madame, looking at him with a smile.

'Decidedly. May one ask what it is for?'

'Pastime,' said madame, still looking at him with a smile, while her fingers moved nimbly.

'Not for use?'

'That depends. I may find a use for it one day. If I do—well,' said madame, drawing a breath and nodding her head with a stern kind of coquetry, 'I'll use it!' (pp. 199-200)

Madame Defarge は Charles Evrémonde, called Darnay がギロチンで首をはねられる現場に居合わせることが出来ない。憎しみのあまりに, Darnay の妻 Lucie をも倒そうとする革命の狂気が Madame Defarge を覆い尽くしていたのである。革命の狂気からわが身を護るのは humanity だ。⁷⁾ 彼女は Lucie を守る Miss Pross によって (誤って) 殺されてしまう。Madame Defarge は「死」を経験することになったが、「甦り」を経験することは無い。そこに「許し」がなかったからである。

「原罪」の存在は過酷だ。Dr. Manette の獅子奮迅の努力によって獄屋から解放された Darnay はその日のうちに再度の投獄に合う。Dr. Manette の活躍の場もここまでだ。Dr. Manette が獄中にある時に例の One Hundred and Five, North Tower でしたための「憎しみ」の手紙が彼の神通力を奪い取ってしまったのである。今度こそ Darnay は「死」の淵に追いやられたことになる。助かるためのあらゆる手立てが失われてしまった今、「死」が確実に Darnay に迫っているのだ。「原罪」に対する「死」はそれほど過酷なのだ。ディケンズは自分のイニシャルを Charles Darnay に冠しながら, Darnay の助かる見込みを確実にもぎ取っていく。そうしなければ, ディケンズ自身の「甦り」が果たされることはないとしても言いたげな

のだ。

6

そうしておきながら、もう一人の自分を登場させるのである。法廷弁護士 Sydney Carton は読者にとって目障りな存在である。法廷で Darnay を助けたかと思うと、いつの間にか Darnay の恋敵になっている。ディケンズがその Sydney Carton を『二都物語』の本当の主人公と考えていたこと⁸⁾を納得するには、それほど時間は必要ではない。彼はロンドンの Dr. Manette 一家の住いに入居することによって、その心の中が少しずつ整理されていくのである。その原動力になっているのが Darnay の妻 Lucie への「愛」である。その「愛」は Carton らしくもなく、純粋なものである。それまでの Carton は自暴自棄な存在であった。彼が Darnay に語る言葉は寂しい。

‘I am a disappointed drudge, sir. I care for no man on earth, and no man on earth cares for me.’ (p. 90)

しかし、Lucie と人生を語る時、彼は真剣だ。長い間忘れていた古き良き昔のことを思い出す余裕が生まれたのだ。そして思わず涙を流すのである。

Looking gently at him again, she was surprised and saddened to see that there were tears in his eyes. There were tears in his voice too, as he answered:

‘It is too late for that.’ (p. 164)

Dr. Manette 一家が住むソーホーに出かけるたびに Carton の心は純真さを取り戻していく。ディケンズは、それが「愛」の力であると読者に訴えているのだ。この「愛」の力で Carton は「甦り」を体験する。Lucie に Darnay という夫がいる限り、Sydney Carton の心はさいなまれる。これが

Cartonの「死」の体験なのである。酒に酔ってDarnayに絡んでいたかつてのCartonが、『二都物語』の3巻では、強いプレッシャーの中でも酒を口にしなかったのはその体験のなせる業なのだと、ディケンズは我々に報告する。Darnayが再逮捕されたことについて語り合うMr. LorryとSydney Cartonの口は重い。Mr. Lorryに父親を感じ始めていたCartonは、将来を囑望されていた実直な若い頃、父親の葬儀で読まれた聖書の言葉を思い起こす。Mr. Lorryに父親以上の存在、つまり神、を感じ取ったとも考えられる。なにしろ、Mr. LorryはSydney Cartonが生まれるずっと以前からTellson's Bankに在職し、いつまでもTellson's Bankで働き続ける可能性を秘めた普遍的な人物なのだ。

These solemn words, which had been read at his father's grave, arose in his mind as he went down the dark streets, among the heavy shadows, with the moon and the clouds sailing on high above him. 'I am the resurrection and the life, saith the Lord: he that believeth in me, though he were dead, yet shall he live: and whosoever liveth and believeth in me, shall never die.' (p. 351)

Sydney Cartonの頼みの綱はもはや自分自身ではない。それまではCartonとは無縁であったはずの神の力こそが彼の頼りとするところなのだ。だから彼はこの向こう見ずな、達成不可能に思える難事業の秘密を誰にも明かさない。その秘密を知っているのはCartonに秘密を握られてしまったスパイのMr. Barsadだけだ。このスパイとの連携の成否がDarnay救出の鍵だ。

Sydney Cartonは「死」の待つ監獄への道に赴く。それは緊張と恐怖の伴う道だ。彼は念仏を唱えるようにキリストの言葉おもひを繰り返す。

the words were in the echoes of his feet, and were in the air.
Perfectly calm and steady, he sometimes repeated them to himself as

he walked; but, he heard them always. (p. 352)

彼の拠り所はもはやそこにしかない。しかし、彼の心は穏やかである。彼は泥道を横切るのに苦勞している一人の少女に手を貸す余裕すら持ち合わせている。もはや何者をも恐れる必要はないのである。彼に必要なのはこの神の言葉に信賴することだけだ。したがって Carton は長い間彼を縛ってきた酒に頼る必要もないのだ。彼は酒の代わりにコーヒーを飲んで (Sydney Carton drank nothing but a little coffee, p. 353) Darnay にギロチンの宣告をする裁判の傍聴に出かける。

Sydney Carton の本当の意味での「死」の体験はまるで幸せに彩られた家庭にいるかのようだ。「死」の恐怖に怯える一人のお針子 (seamstress) との対話は、キリストが十字架上で交わした強盗との対話を思い起こさせる。

Dost not thou fear God, seeing thou art in the same condemnation?
And we indeed justly; for we receive the due reward of our deeds;but
this man hath done nothing amiss. And he said unto Jesus, Lord,
remember me when thou comest into thy kingdom. And Jesus said
unto him, Verily I say unto thee, To day shalt thou be with me in
paradise.⁹⁾

Sydney Carton はこの直後にギロチンで、首をはねられる。主人公の「死」は『二都物語』の終焉である。ディケンズは Carton の「甦り」を Lucie と Darnay の長男に託している。しかし、Sydney Carton の「甦り」の姿は既に『二都物語』の中に表現されていることに、ディケンズ自身も知らない。それは、先述の少女をぬかるみから助け出した心であり、またお針子の死の恐怖を和らげた護送車 (tumbrel p. 418) 上での Carton の心である。「甦り」の力は実に、人々の心の中に深く浸透するものなのだ。編物に Carton の首を「23個目」と編み込んだサン・アントワーヌ通りの女たちの

中にも、「彼は預言者のようだった (he looked sublime and prophetic p. 422)」と言った者がいたに違いないのだ。

しかしディケンズは「死後」の「甦り」に期待するほどところにゆとりはなかったのだ。Cartonの護送車上での姿は、いわゆる「天国」に於るCartonの姿なのであるが、Lucieを失った代償としての seamstress への愛の表現がいかに美しくとも、ディケンズには物足りない。これは「人生最大の安らぎだ (It is a far, far better thing that I do, than I have ever done; it is a far, far better rest that I go to than I have ever known.’ p. 424)」と最大限の賛辞を惜しまないのであるが、ディケンズの目指す「甦り」はあくまでもこの地上が基盤になっていなければ立つ瀬がないのである。一方、Cartonの本心は、人生に疲れ、何者にも犯されることのない安息を求めていたのである。¹⁰⁾

しかし、よく観察してみるならば、そこには落とし穴がある。『二都物語』の中でCartonに次ぐ「死」の体験者である Charles Darnay はキリストの十字架を連想させるに十分なCartonの犠牲によって、見事に「甦り」を果たすのであるが、その道は相変わらず険しい。ディケンズが『二都物語』の巻末に綴った「生き残った者たちのその後」はあまりにも少女趣味的である。フランスが「死」(地獄)で、イギリスが「生」(天国)とでも言いたげである。ディケンズ自身が述べているように、この地上での「天国」の状態は瞬時に現れて、瞬時に姿を消していくはかないものなのである。

In the fair city of this vision, (中略) gardens in which the loves and graces hung ripening, waters of Hope that sparkled in his sight. A moment, and it was gone. p. 97)

獄屋から無事脱出し、Dr. Manette一行と合流したDarnayのフランス脱出は、その後の彼らの生活が、ディケンズが想像している以上に険しいことを予感させる。ロンドンの「道」もパリの「道」同様に泥にまみれ、ほこりにまみれ、犯罪が日常化していることを指摘したのは、ディケンズ

自身なのだ。ディケンズが Charles Darnay に託した、この地上にあつての「甦り」の実体は、Carton の永遠の安らぎと較べるならば、いつ 'One Hundred and Five, North Tower' と言いつつ明かりを消して靴修理工に戻るか分からない不安をわずかに残しているのである。

In England, there was scarcely an amount of order and protection to justify much national boasting. Daring burglaries by armed men, and highway robberies, took place in the capital itself every night; families were publicly cautioned not to go out of town without removing their furniture to upholsterers' warehouses for security; the highwayman in the dark was a City tradesman in the light, (pp. 2-3)

註

- 1) Ecclesiastes, Chapter 3, verses 1-11, *THE BIBLE, AUTHORIZED VERSION*, John Stirling, ed., (The British & Foreign Bible Society, 1962)
- 2) Ruth Glancy, *Dickens's Revolutionary Novel*, (Twayne Publishers · Boston, 1991), p. 26
- 3) Charles Dickens, *A TALE OF TWO CITIES*, World's Classics (Oxford University Press, 1963), 以下、示してある頁数は本書からの引用箇所である
- 4) Andrew Sanders, "A Tale of Two Cities." Michael Hollington, ed., *Charles Dickens Critical Assessments Vol. I* (Helm Information, 1995), pp. 473-474
- 5) Robert Alter, "The Demons of History in Dickens's Tale." Harold Bloom, ed., *Modern Critical Interpretations Charles Dickens's A Tale of Two Cities*, (Chelsea House Publishers, 1987), pp. 17-18
- 6) イタリアック筆者
- 7) Barton R. Friedman, "Antihistory: Dickens' A Tale of Two Cities." Michael Hollington, ed., *Charles Dickens Critical Assessments Vol. I* (Helm Information, 1995), p. 488

-
- 8) Ruth Glancy, *Dickens's Revolutionary Novel*, (Twayne Publishers · Boston, 1991), p. 19
 - 9) St.Luke, Chapter 23, verses 40-43, THE BIBLE, AUTHORIZED VERSION.
 - 10) J.M.Rignall, "Dickens and the Catastrophic Continuum of History in *A Tale of Two Cities*." Harold Bloom, ed., *Modern Critical Interpretations Charles Dickens's A Tale of Two Cities*, (Chelsea House Publishers, 1987), p. 132